

往生浄土の道

狐野 秀存

目次

■ 「信に死し願に生きよ」の呼びかけ	1
■ 豊かな生活	4
■ 未来を夢見る	10
■ 浄土を見失った生活	15
■ 浄土へ往生するということ	19
■ 大地に立つ	28
■ ここはどこか、われわれはだれか	32
■ 「ここ」で生きる	39
■ 往生の信心	47

■ われらと共にいる親鸞聖人	53
■ あとがき	56

■「信に死し願に生きよ」の呼びかけ

こんにちは。大谷専修学院に勤めさせていただいております狐野秀存と申します。今日は「念仏往生の道」という講題でお話したいと思えます。この講題を付けさせていただいたのは、曾我量深先生（一八七五—一九七二）のお言葉を憶い起こしたからです。ちようど五十年前、一九六一（昭和三十六）年の四月二十一日に親鸞聖人七百回御遠忌の記念講演会が京都会馆にて行われました。そこで曾我先生が、「信に死し願に生きよ」という講題でお話をされました。曾我先生は清沢満之先生（一八六三—一九〇三）の教えを受けて、親鸞聖人の教えが今日の私どもの生活のただ中に生きてはたらいっていることを明らかにされた大切な方です。本当に丸々五十年前のことですね。「信に死し願に生きよ」と

曾我先生が訴えられたのです。

それから今日まで五十年、半世紀の時を経ているわけですが、果たして私どもの縁を深くする真宗しんしゅう大谷派おわたにはという真宗教団が、曾我先生の訴えかけ、呼びかけにどれだけ応こたえることができたのか。また、どういふかたちで曾我先生のお言葉を、私ども一人ひとりの胸の内に受けとめてきたのか。そのことが今、あらためて問われているのだらうと思います。

「信に死し願に生きよ」は、もちろん曾我先生ご自身が親鸞聖人の教えを受けて感得された言葉ですけれども、また同時に、当時八十六歳であつた曾我先生から五十年後の私どもへの伝言、宿題であると思います。その曾我先生の呼びかけを聞き取るために、私が直接に教えを受けたお二人の先生の言葉をご紹介します。

まず、お一人目は、かつて大谷専修学院の学院長をなされていました故・信國のふにあつし淳先生（一九〇四—一九八〇）の言葉です。

まことに我々は、我々自身の生活を顧かえりみます時、それは完全に浄土じょうどを見失つた生活であることを認めなければなりません。

もうお一人は、先年急逝きゅうせいされました、前学院長の竹中智秀先生（一九三二—二〇〇六）の言葉です。

浄土へ往生するということは、ここで生きられるようになったという事です。

このお二人の先生の言葉に教えられて、親鸞聖人が明らかにされた浄土の真実に生きる道をたずねてまいりたいと思います。

### ■豊かな生活

信國先生は「まことに我々は、我々自身の生活を顧みます時、それは完全に浄土を見失った生活であることを認めなければなりません」とおっしゃいました。そして、その信國先生のもとで生涯を尽くして大谷専修学院の教育にいのちを捧げられた竹中先生は、「浄土へ往生するということは、ここで生きられるようになったということです」とおっしゃいました。このお二人の言葉を重ね合わせてみますと、どうやら私ども

は「ここ」という生活の場所を見失っているということになります。

私どもは普段、当たり前のように、「自分はちゃんとここで生活しているんだ」「まあまあ苦勞もあるけれども、とにかく私はやっているぞ」、こういうふう信じて疑わないわけです。しかしながら、お二人の先生の言葉を重ね合わせてもう一度聞き直せば、自分はずっとやっているという生活は、自分の思いの中の生活のことを言っている。我が思いの中で私は私なりにちゃんとやっているではないかと言っているのです。自己中心的な思いの中にあぐらをかいてしまつて、事実、われもひと共にも、それこそ生活の苦勞を共にしている「ここ」という場所が本当はよく見えていないのではないか。そういうことをお二人の先生の言葉から知らされるわけです。